

ZEN

全道展交流紙
2018.3
No.55

全道展事務局長就任にあたって

田崎 謙 一



手で思考することの大切さを伝えて行く
—広くアンテナを張りめぐらせ勉強を—

昨年十月の全道展拡大会務委員会にて前任の川本ヤスヒロ氏から事務局長を引き継ぐ事になりました。全道展本展は今年で73年、学生美術全道展は60年となり大変長い歴史と共に多くの先輩たちの業績によって北海道を代表する公募展の一つとして現在に至っています。私は全道展に出品をして39年目となりました。その間、多くの先輩会員に激励され、良きライバルとなる仲間にも恵まれて、全道展という場で成長させていただいたことに心から感謝しています。気が付いたら多くの先輩会員が鬼籍に入り、同期の仲間の会員も消えていき始める年齢になっていることに愕然とします。今を逃すと全道展へ何も貢献することなく去ることになるかもしれないと思いました。私ごときに全道展の舵取りを全うできるか大変重い決断でした。引き受けた以上は腹をくくり皆様のお力をお借りして努力したいと思います。

現在の全道展は様々な課題を抱えています。一つは出品者の減少です、これは日本社会が抱える問題でもあり、少子化という波が全道展にも着実に影響を与え始めています。全道展では23歳以下の出品料の半額、入場料の無償化などの努力をし一定の効果を上げています。会場では作家自身の制作に対する考えや、姿勢を話していただき、質問を受けて出品者との交流を密にしていくギャラリートークなどの企画をし、努力しています。学生向け

に会員による実技の講習会を開き、活気ある学生たちの眼差しも感じています。今は表現の方法や手段が多様化し拡大しています。固定した感覚にとらわれることなく、あらゆるジャンルとクロスオーバーした若い世代の新しい感覚や発想を理解するべく我々も常にアンテナを張りめぐらし頭が硬直しないように勉強していかなければなりません、それと同時に、インターネットやスマホの爆発的普及によって社会が大きく様変わりし、デジタル思考が席卷している現状で、自分の中では絵筆を握る手の感触、アナログ思考でものを考えることの重要性をひしひしと感じています。長い歴史を持つ全道展も、これから大きく形を変えていかなければならなくなるかもしれませんが、一つの砦として私は絵筆(手)で思考して行くことの重みを若い世代にも伝え大事にして行きたいと思っています。

昨年末には手島圭三郎会員、渡会純价会員の二人の版画部重鎮会員が道功労賞、道文化賞を受賞し全道展にとっても大変名誉ある一年の締めくくりとなりました。全道展は個を大事にする作家集団であり親分子分のいない公平な会であることを先輩会員から教えられてきました。個々の作家が厳しい姿勢で作品を制作し、お互い切磋琢磨できる環境を維持できるように皆さんのお力添え宜しくお願い致します。

平成 29 年度 名誉ある北海道功労賞・北海道文化賞など 全道展の 3 氏が受賞する

北海道の学術教育、文化、産業の振興に顕著な業績を挙げ多大な貢献を果たしたとして個人や団体を表彰する本年度の道功労賞が、手島圭三郎会員（版画）に贈呈された。また北海道の文化の向上発展に、特に顕著な功績を挙げたとして同じく版画部門の渡会純价会員に北海道文化賞が授与された。さらに本紙「ART STAGE」の執筆者、深川アートホール東洲館館長の渡辺貞之会員（絵画）が第 6 回「北の聲アート賞」の大賞を受賞した。3 氏はそれぞれの分野で永年にわたり精力的に創作活動を続け、指導的立場で後進の育成にあたる一方、地域に根ざした幅広い活躍でも知られる。

ベテラン会員の受賞にお祝いの会が開催され、和やかな祝福ムードのなか作家の深い人生観やエピソードが語られ、親交のある人々のスピーチが相次ぐなど 2017 年は明るいニュースで幕を閉じた。

手島圭三郎会員



高橋はるみ北海道知事の祝辞



祝賀会での談笑も和やかに



大型絵本「カムイチカプ」の朗読

木版画家であり、木版画絵本のバイオニア。北海道の自然界の厳しき暖かさを刻刀に込めた作品で、老人から幼児までが親しむ。ダイナミズムと清冽で繊細なタッチの作品は、日本国内はもとより海外でも高い評価を得て数々受賞、翻訳も多い。毎年のように出版、'87、'88 ニューヨークタイムズ選世界の絵本ベストテンに選ばれた。昨年、絵本 36 作品などで構成され集大成となる「手島圭三郎全仕事」が刊行された。

渡会 純价会員



謝辞を述べる



心地よい音色 ヴァイオリンデュオの演奏



2013年5月31日～6月15日までの
道新夕刊掲載文を小冊子に

20代の始めに日本を代表する版画家の一人、駒井哲郎と銅版画の作品とに出会い、ほぼ独学で本格的に版画の道へ。人間と美酒と音楽をこよなく愛する。創作活動もチャレンジ精神もアクティブで年齢を感じさせない。展覧会は札幌を含め道内外や海外など多数。イギリス大英博物館や美術館などに作品收藏。詩情あふれる版画集、著書のファンも多い。

渡辺 貞之会員

本業の画家の他に長年、美術館館長として多くの企画展の開催に携わる。演劇の脚本、演出家の顔を持ち道内、外の美術教育にも力を注ぐなど、まさにマルチに活動を展開している。昨年、創立 25 周年ふかがわ市民劇団公演を成功させた。今春は出演者など総勢 32 名を率いて札幌での初公演があり、観客から温かい拍手が贈られた。地方に立脚した発信者の存在は大きい。



柴橋代表より賞状の授与



2月4日(日)かでの2・7かでのホールで上演後、舞台挨拶の出演者らと

明治—大正—昭和、そして平成に繋ぐモノ語り 町の衰退に反比例して、増え続ける歴史の証人たち

かつては炭鉱で栄えた歌志内市。この地に生まれた芥川賞作家、高橋揆一郎（1928～2007年）に「うなぎの寝床のまち」2017年11月19日（北海道新聞）と表現されたように細長い山あいの街だ。

この歌志内に膨大な数の古時計をはじめ、生活雑貨など歴史を感じさせるモノ達が息づいている資料館がある。24年続く館の名を「大正館」という。館長の本城義雄会員（絵画）に専門誌「労働の化学」に掲載された文の一部を寄稿してもらった。



知る人ぞ知る大正館の建物



収蔵品のごく一部

私の「資料館」は、大正9年に建てられた煉瓦造の総面積60坪余りの洒落た建物で1993年に大規模リニューアルし、大量の収集物を並べ一度っ切りのつもりでその翌年のゴールデンウィークに公開した。

主に明治から昭和初期の生活道具（骨董）を展示している。

私の収集歴は柱時計から始まりその数は300体に近づいている。

当市は炭坑閉山（'97）で急激な過疎化の道を辿り、それに反して当資料館は充実していった。

明治23年に町が拓けて鉄道、電気も早くから引かれた。収蔵品はその頃の物が多く当市の歴史の証人でもある。その点数は1万点を超え増え続けている。これらが私の絵のモチーフになるのだが、気が付くと毎回同じ物が登場してしまう。この物たちを通して作品に意志を表現するには、形態の美しさと同時に経過時間（歴史）が重要になる。

記憶を辿ると骨董あさは絵を描き始めた頃だった気がするからもう60年にもなる。最初は町の老舗の解体現場から貰い受けた「赤いタンス」からだ、お礼にビールを届けに現場に戻ると人夫にこれも持って行けと汚れた大便器と小便器（朝顔）を出された、私は憤慨して受け

取らなかった、今では骨董屋でも入手困難な染付けの逸品なのに……あの時お礼のビールも上げないで帰って来た事を後悔している。その時の、傷だらけの「赤いタンス」は作品「恐山の石」（1981）に登場させた。

次に出会ったのは柱時計だ、ある教会のバザーで大正、明治時代の「八角時計」と「四ッ丸時計」を入手し、外人の宣教師さんの案内でその教会の2階にある修理場を見せて頂いた、100個程の古時計が山積みされ修理を待って居た。その中には価値ある逸品もあったはずだが当時の私は時計の知識もお金も無い悲しさで今でも夢にまで見るひとこまである。

全道展に出品し始めた頃に古時計を300個収集の方に出会った。その一部（100個）を見た。その数の多さに圧倒されたが、その時計の一つ一つが機能と形態美が合致した頂点と思わずにいらなかった。

ただ古いだけではなく、これらは、確実に歴史を刻んで来た。そして私の生き様を柱の高みから醒めた目で見下ろし「お前の生き方はよくないぞ」（当たっている！）と叱咤されている気がする。とすると彼らは意志を持った生き物と言えないだろうか。結論、私は時計を1体2体と数える事にした。

P.S. くもしかして私の前世は時計だったのかも？>

十勝地区展の報告

—ありがたい地区展のファン—

十勝地区 代表 齊藤 隆博

7月末から帯広は本格的な夏に入り第21回全道展十勝地区展は帯広市民ギャラリーで平成29年8月3日から8日迄開催されました。十勝管内の入賞・入選者・会員・会友の作品40点を展示しました。最近では地区展開催を楽しみにしてくれる人が多く、入場者は約800人で例年に比べても各々個性の際立つ展覧会でした。創作は共感を得ることが大切な要素ですが、怪我の為車椅子で訪れた方が彫刻に触れて感動し、作家と言葉を交わす温かい場面がありました。主題を追求する姿勢も日常生活の延長上にあることが肝心です。流されやすい日常の雑多な刺激や資料を絞り込んでいく時間を大事にしたいと思います。何を表現するかを決める至福の場でもある気がします。入選は11名で受賞者は5名おり、少し作品に触れると細密な筆致で食のあり方を問う梅津美香（会友賞）、寄せ木づくりで新境地を開く川橋雪弘の彫刻（佳作賞）、確かなデザイン力を持つ佐藤真康の絵画（奨励賞）、細部の表現が魅力的な酒森夏海の絵画（奨励賞）、柔らかな曲線が持ち味である保坂順一の工芸（奨励賞）です。また地元の食材を扱い広大な十勝を表現した工芸荒井千



20周年の飾り付けが終ってホッとした笑顔



開館準備もOK。さあ、今日からオープン、受付風景

恵子（初入選）と、着実に21年目の足跡を残すことが出来ました。今年の第22回全道展十勝地区展は8月2日～7日迄帯広市民ギャラリーで開催します。地区会員一同より充実した作品創りを目指したいと思っております。最後に多忙の中にもかかわらず全道展事務局の方々のお心遣いに感謝とお礼を申し上げ報告と致します。

二つの道東地区展を終えて

—新たに根室地区展を開催—

釧路地区会事務局 森川ヒロシ

この報告がZENに掲載されるのは雪解けが少しずつ進み始める頃のことだと思う。年を越してしまっただが、道東地区の新たな一歩を報告したい。

今回の地区展の大きな前進は、根室地区展の開催だ。市制施行60周年を記念しての開催。8月19日(土)、根室展において川本前事務局長を迎え、ギャラリートークが

行われることから是非ともお会いしたく、久しくR44号線を東に早朝より車を走らせた。行く道すがら樹木が次第に低くなり広大な根釧台地が広がってくる。厚床を過ぎ、春国岱にさしかかり道の駅スワンに立ち寄る。驚いた。樹木の倒壊が進み、かつて僕の記憶に残る景色と異なっていた。僕が訪れたのはいったい何年前のことだったのだろう。時の刻みが眼前にあった。

その日は天候にも恵まれ、夏の根室に市街にもぎやかであった。釧路から高橋会員、中江会友がかけつけた。地元の三浦会員も参列。根室市文化協会会長でもある宇佐美氏が中心となり根室特別展の開催にこぎ着けた。巡

回展がなくなってから全道展の作品が運び込まれたのは何年ぶりのことだろう。宇佐美さん、柏崎さん、齊藤さんが、最東の地ならではの風土に育まれた感性で出品を続けている。適切且つ軽快な川本事務局長のお話一同聴き入り、大変有意義で心地よい時間を過ごす



「ZEN」を手に、気心知れたメンバーと



川本ヤスヒロ会員の講評

ことができた。今回の開催は釧路ばかりではなく根室管内の多くの方々にも全道展を観ていただき、知っていただく好機となった。

また、特記すべきことは、道東地区から今回展で初入選者が4名も出たことである。地道な活動の積み重ねの歳月に共感を生み出したものと思う。また、入賞も続い

ている。互いの作品が相呼応するように刺激しあい、より質の高い作品へと向かうために自身としっかり対峙しながら道東の風土より発信を続けていきたい。

たとえ春国岱の樹木が朽ちていこうとも、宇佐美さんの描く地下に力強く這い巡らされた樹根のように我らも強く。

2017年 全道展室蘭地区から —フリートークも交えて—

室蘭地区事務局 矢元 政行

今年も「ZEN」の原稿依頼が来た。考えてみたら全道展室蘭地区の事務局代表を10年以上務めているので、毎年、同じような内容で地区の活動紹介を書いているような気がします。事務局で次年度から「ZEN」の原稿の依頼を持ち回りで……」との提示に感謝します。

さて、今年度の全道展室蘭地区作家の近況について報告します。

全道展72回展は、室蘭地区から新会員に大築笙子さんが推挙され、奨励賞に中澤文隆さんが受賞となりました。本展終了後の7月8日(土)には、恒例の祝賀会と出品者の交流懇親会が、市内の居酒屋で20名の参加者を得て行わ

れました。受賞者のスピーチ、参加者全員から作品制作の意図や思い、悩み、次回に向けての抱負などが語られ、中身の濃い充実した時間を過ごすことができました。

毎年行っている室蘭地区作家展ですが、平成29年8月23日(木)から27日(日)まで5日間の会期で開催しました。最終日には、私と山田会員によるギャラリートークを行いました。出品者が自身の制作意図を話し、それを受けて二人の会員が絵に対してコメント、質問や意見などフリートークの形で約1時間にわたり行いました。

また、室蘭市民美術館では、全道展作家の展覧会が続きました。4月1日～5月21日には「佐々木俊二の世界展」～自由と平等～、5月31日～7月30日には「矢元政行展」～私の見ていた世界～、9月27日～10月29日には「石塚貴羊史展」～いきものたちの季節～などですが、これからも個々の作家が自身に向き合い常にベストの作品を創ることが最も重要だと考えます。



出品者揃って会場の前で



講評は勉強になります

全道展ぶろぐ

広報手段として2011年のホームページを始め、ぶろぐ、Facebookを開設。随時、会員・会友などの展覧会情報を発信中。個展など案内DMは庶務部、西村徳清会員まで送付して下さい。(全部門対象です)



全道美術協会

検索

<http://www.zendouten.jp>



- 「地区だより」は各地区展の開催時期に合わせ、3月号か9月号のどちらかに掲載しております。函館地区展報告は今後、9月号に掲載のことにします。
- 「ZEN」に対するご意見、ご要望などをお寄せ下さい。紙面づくりの参考とさせていただきます。 —ZEN 編集部—

—菅さんをしのび 十勝の作家展を終えて—



渡邊 禎祥=帯広

お会いする度に、菅さんの体調にはいつも気遣いしてきました。しかし、その都度彼は優しい笑顔で「美人薄命だから」と。ほくは即「菅さんなんて、けして美人じゃない！」と反発していたのが今でも記憶に新しい。

昨年9月発行 ZEN No.54 で、一菅訓章氏を偲ぶ・十勝の美術作家展一の開催記事を掲載戴き、編集部からは更に企画展終了後に、その報告的な原稿を依頼された。要約のまじり拙文でお許しを。

生前中の菅さんは例年6月の「全道展」は楽しみにして授賞式、懇親会に参列し、来賓挨拶ではキーワードの如く鹿追町ゆかりの画家神田日勝にほれ込んだことから、「全道展、独立展、そして神田日勝記念美術館」と館長の立場でユーモラスに宣伝も疎かにしなかった。彼は真に「全道展」のファンでもあった。

しかし、2016年1月12日、不合理にもまだ65歳という若さで病魔に屈してしまった。個人名を冠した地方の小規模美術館のパイオニアとして精力的に発信活動を展開させている真っただ中であつた。

神田日勝記念美術館の真っ赤に燃焼していた炎が、突如と小さくなった気がした。その訃報は道内外に報じられた。

この時、大変驚き「予想もしなかった」との電話が琴似の「北都館ギャラリー」松浦氏からだった。つまり菅館長はいつもいつもご来店下さり、展示作家の作品を丁寧に観て戴き、おしゃべりも出来ないまま「これから東京に行きますので…」と、急いで店を後にするとか。(これは北都館以外でも、どこに行っても忙しい菅さんだった)。

ほくは、会期2016年8月1日～8月31日、北都館ギャラリーで「一渡邊禎祥一昭和の音色一」個展開催を依頼されその準備の頃に、松浦氏から「生前中のご厚情に感謝し、十勝のゆかりの作家展、10名程度の作家で企画展を開



神田日勝記念美術館の展示室入口の表示

催したいので協力を」と依頼された。以後趣旨に賛同作家10名で8月に「菅訓章館長を偲ぶ・十勝の画家たち展」を開催させて戴いた。会期中には鹿追町からも関係者の皆様と多数の作家仲間も来場下さり、菅さんを偲んだ。

そして、2017年新春を迎えた頃から、地元の各関係者から「札幌で菅さんを偲ぶ展を開催されたことなりには是非菅さんの鹿追町で、追悼的企画展を開催しては」との機運が高まり、推進役に微力ながら、準備会を設ける。

当面呼び掛け人となった事で、全道展十勝地区会から齊藤隆博、今西直人、森弘志、近藤みどり諸氏と神田日勝記念美術館館長小林潤氏にも加わって戴き、準備会として話し合い、最終的には賛同する作家への呼びかけで実行委員会をたち上げ41名の構成メンバーでスタートする。

- ・実行委員長 渡邊禎祥 ・副実行委員長 小林 潤
- 副実行委員長 武田耕次 ・事務局長 齊藤隆博
- ・事務局 中谷有逸 他9名 ・会計 今西直人
- 近藤みどり 監査 小笠原洋子



町民ホール展示室風景

会期/2017・11月10日(金)～19日(日)

会場/神田日勝記念美術館、鹿追町民ホール

- ・管内39作家が1点ずつ自作を出品、2会場のうち町民ホールには100号の大作を中心に油彩、アクリルなど絵画24点を展示、神田日勝館2Fには版画、水彩、工芸、彫刻の15点を展示する。
- ・来館者数 延べ1,062名(2会場あわせて)
- ・菅さんの「梓」なき交友を広げた人柄は勿論であり、我々十勝の作家仲間も、共通理解を共有し所属団体等の垣根を越えて、39名の作品が一堂に展示された事は評価に値する。黄泉の彼方から笑顔の菅さんは、グジャレを発しては喜んで下さったと思う。全ての関係者に感謝!

ART STAGE

—作家の痕跡—

2017.7月～12月

「木村富秋・宮地明人・板谷諭使・川本ヤスヒロ・川上加奈」 それぞれの企画展から

深川市アートホール東洲館館長 渡辺 貞之

片方の目で過去を見つめ、もう一方の目で現在を見据えようとしている私。日常生活をモチーフにしなが、ある特定の人や物を画面の上に再現するのではなく、観る人が自分との共通な身近な気軽さを感じてくれるような絵。それには、描かれた人物や物の裏側に無数の人間や物質を隠し持っているようにイメージしなければと思うのです。

- ある風景や事物を内存された素直さと厳しさ、洞察力を駆使して創り上げる空気感。厳しい造形課題のもとに描き上げた線や色面の分割は、ストイックな孤独感をもたよわせながら、誰もが求める人間の善の世界を謳い上げる木村富秋氏の世界。



木村富秋 (7.16～7.30)



川本ヤスヒロ (10.1～10.15)

- かつて、骸骨の様々な様相を駆使しながら誰しもの行き着く死のテーマから、一転しておおらかな色彩とマチエール、フォルムの愛らしさ。それらを音楽の世界として表現させる川本ヤスヒロ氏。しかし、かつての死の象徴だった骸骨には何かしらの光明が。今の笛を吹く生の歓びを奏でる女性からは、私はむしろ悲哀感を感じてしまうのです。



宮地明人 (8.1～8.15)

- 素直さ。嘘をつかない目が、作者の家族像を通して肉親の愛から普遍的な愛へ。淡く細密な描写は、「やさしさ」という心情へ観る者を誘い込む。観た者が誰しものが絵の中の人を慈しむ…。だからこそ宮地明人氏の前でじっと佇む人が多いのだろう。

- 一見可憐な人形のような立体像。しかし、言い知れない生命体の不可解さ。静かな展示室に一人佇むと、私自身が人形に同化してしまうようです。生命体の虚構性と、生命のない人形の実存感という矛盾した不可思議さを提示する川上加奈氏の彫刻。



川上加奈 (12.1～12.15)

- 室内で無表情に立ち尽くす少女。何をしようとしているのか。現実の世界のようでどこか仮想のフィルターがかかっている。私はなぜ今、ここに存在しているの？。当たり前のこととして通り過ぎてしまう素朴で根本的な問いを投げかける。その一方で「ゴジラ」「ネコ」などの張りぼての立体作品。それは時間と共に忘れ去られていく、かつての人気キャラクターの存在の不確かさなのか。板谷諭使氏の作品に漂う哀感。



板谷諭使 (11.1～11.15)

いずれの作家も決して焦らない。悠々毅然とした時の流れを知っているようです。日常を信頼し、時と対話を重ねているのです。作品の前に立ち、観る人は能動的にその意味を探そうとします。つまり視覚的には不在のものを、知覚・認識によって探し出そうとするのです。アートは単なるオブジェではない。能動的な「意味」探しによって初めて作品が構築されるのです。アートは「観るだけ見えてくる」ことを各氏は提唱しています。現代という廃墟の中にいる感覚を持ちながら、それでも歴史的な時間の流れの中で束の間だけれど確かに生きている人間としての自己の存在を掬い上げ包み込んでいるのです。

2018年 第73回全道展

- 会期 2018年6月13日(水)～6月24日(日)
札幌市民ギャラリー(中央区南2東6)
10:00～18:00(最終日16:30) 月曜休館
- 部門 絵画・版画・彫刻・工芸
- 搬入 6月5日(火)・6日(水) 10:00～17:00
- 審査 6月7日(木)～8日(金)
- 賞 全道美術協会賞・北海道新聞社賞・八木賞・佳作賞・奨励賞
- 出品料 3点まで8000円、1点追加ごとに1000円
23歳以下の出品料半額(1996年4月2日以降に生まれた方)
- 観覧料 当日券800円、前売券600円 23歳以下・障がい者無料



第72回全道美術協会賞
パッкосの信女 F200 木村 麻衣

全道展元会員、 紺野修司さんの絵画展開催

(2017年8月25日～9月25日
岩見沢市絵画ホール・松島正幸記念館)

テレビアニメ「鉄腕アトム」の原画担当としても活躍し、ユニークな経歴のあった紺野修司さんは帰道の機会がないまま2013年に死去。今回の展覧会には洗練された色彩と極限まで整理された構図で、透明感漂う遺作27点が展示された。

第59回学生美術全道展

—煌めく若き星たち— ミニ講座が好評

2017年10月7日(土)～10日(火)開催

大学生や高校生らが一人の表現者として挑戦する学生美術全道展。今年は4部門(絵画・版画・彫刻・工芸)の応募総数206点、このうち入賞、入選の192点が札幌市民ギャラリーに展示された。昨年より応募数は減少したが、最高賞に輝いた伊田光里さん(北海高校3年)が大画面で力強い作品を出品するなど、個性もクオリティも高い、見ごたえのある展覧会となった。

8日に行われた表彰式は、八子直子審査委員長の講評に続きミニ講座は川名義美会員(彫刻)がスライドを使用し自作の制作プロセスを軸に、作品を制作するうえでの大切なこと、技術の重要性などを説明した。大いに刺激を受けた約60名の参加者が、熱心に聞き入る有意義な講座となった。



田崎全道展事務局長より賞状の授与

全道展事務局人事異動

会計部長が吉川勝久さんから
福島孝寿さんへ



前任の吉川部長から引き継ぐことになり、責任の重さを痛感しております。3年間よろしくお願い致します。

第7回 新鋭展

—自作に信念と誇りを—

2017年11月7日(火)～12日(日)開催

第72回全道展の入賞者と会友、新会友の作品25点を展示した展覧会がギャラリー大通美術館で開かれた。

本展と別に制作した新作で、それぞれ個性的な作品が並び、大通りという良い立地ということもあり、来場者数も多く、連日盛況であった。

7日に行われたオープニングパーティーでも、多くの会員、出品者による交流で盛り上がった。

謙虚に自作を紹介する出品者の姿勢に、「もっと自信と誇りをもちなさい」という会員からの叱咤、激励もあり、大いに盛り上がった。

これから全道展を引き継いで行くであろう新たな作家たちに期待したい。



講評の後は和やかに歓談

編集後記

少子高齢化の影響で…というセリフが昨今は本当に多いと感じる。現実を直視し、次のステップに足をかけよう。「ZEN」ご協力を今年もよろしくお願い致します。

〈川本(ヤ)・本間・(文責)米澤〉